大将軍神社

二宮修二

大将軍神社　拝殿

はじめに

挾間町篠原の通称、大将軍神社又は、保食神社と呼ばれる、人々によく知られ伝承もある神社について、

①遷座された時期、②祭神

③神社の棟札の表すこと　④信仰した人々の広がり。　⑤その他について調べていきたい。

一、「大将軍神社」遷座された時期について

挾間町誌では、由緒の項で、この神社の創祀については諸説あるとしながらも「源平争乱の折、加藤兵部大夫なる者が、越前国より三体仏を奉じて大分郡時松に至り、建久元年に現在地の小倉山（大将軍山）に安置したという。」とありこの時が、一一九〇年である。

神社明細帳には、「保食神、伊邪那岐神、岩長姫神の三柱は、元加賀国篠原村に鎮座する三社神にして寿永年間源平争乱平家の余族北国に敗走するとき同社へ奉仕する、社司加藤兵部大夫なる者、災害波及を怖れ即ちこの三社神を守護し篠原を去り、豊後国姫島に移る、壇ノ浦の役、又当島を去り同国洗里に転じ、ここにおいて大夫国安の時を待つ。ある夜神託あり曰く、「南方に清潔なる高山あり此の山嶺に遷座すること」大夫霊夢を感じ即ち神勅の如く直ちに同山に奉遷し故郷の名を取り同地を篠原村と号し、小倉山三社神と号す。」とあり、この件についての記録もあったが、正徳年間に火災に罹り悉く焼失したとある。（当社の縁起及び大友家寄進状等数多伝来）正徳年間は一七一一～一七一六年であり江戸時代の中期に火災で焼失してわからなくなっている。

前の篠原村は、加賀の国の篠原村であり、加賀の国をたって姫島にしばらく滞在し、そこを発つと時松に暫くいて、後で現在の場所を加賀の国の篠原の名前を取って篠原村とし、遷座したのである。これが先述した一一九〇年の遷座である。

更にこの神社の宮司が持っていた大正一三年九月二三日に出された「社格昇進願」を見ると「安閑天皇の御宇教到四年越前国より豊後国阿南郷篠原村に勧請された。その時は、愛宕権現とも大将軍社とも称したとある。この記述は、年代が大きく隔たり疑問である。

二、大将軍神社の祭神について

一、「神社明細帳」（明治四十四年に書かれた書類）

大分県管下豊後国大分郡篠原村字松原

村社　保食神社

（一）祭神　保食神　　伊邪那岐神　　岩長姫神

阿須波神　　崇徳天皇　　大山津見命

波比岐命　　大歳神　　天水分神

菅原神　　市杵嶋姫神　　武岩立神

大國魂神　　倉稲魂神　　素さ鳴男命

櫛稲田姫命　加藤清正公

（二）由緒　右、保食神・伊邪那岐神・岩長姫神の三柱は元加賀国篠原村に鎮座する三社神にて寿永年間に源平争乱平家の余族北国に敗走するとき同社へ奉仕する社司加藤兵部太夫なる者災害の波及を恐れ、即ち北の三社神を守護し篠原を去り、豊後国国東郡姫島に移る、壇ノ浦の役また当嶋を去り同国洗いの里に転じ、於いて是太夫国安の時を待つ、此れより数里を時待と号す、今時松村是なり、ある夜神託あり曰く、南方に清潔な高山あり、この山嶺に遷座せよと太夫霊夢を感じ、即ち神勅の如く、直ちに同山に奉遷し故郷の名を取り同地を篠原村と号し、小倉山三社神と称する以上確たる諸記録ありたりしに正徳年間火災に罹り悉く焼失す。

明治維新前は大将軍神社と称し、明治三年神仏分離の際地名に因み松原神社と公称し、明治六年月日不詳村社に列せらる、同六年許可を得て保食神社と改称す。

又、阿須波神、波比岐神、市杵嶋姫命、素戔嗚命、加藤清正公の五神は元篠原村字鶴村に崇徳天皇、大歳神、竹岩立神、素戔嗚命、櫛稲田姫命、大山津見命、天水分神、大國魂命、保食神、加藤清正公、菅原道真公稲倉魂神の十二神は、元小野村堀之内に鎮座の處。すぐる明治十二年三月十三日保食社へ合併出願の處同月十七日許しあり即ち合併す

一、神殿　縦　二間　横　三間
一、渡殿　縦　二間　横　二間
一、拝殿　縦　二間三尺　横　五間
一、神楽殿　縦　六間三尺　横　二間一尺
一、神　庫　縦　一間三尺　横　二間三尺
一、門　長さ　一間四尺二寸　横　一間三尺六寸
一、社務所
一、境　内　六百六十七坪　官有第一種
一、氏子　百八十八戸
一、崇敬者　七千七十戸
一、大分県庁まで　四里三町

（三）由緒書（この記録は、「社格昇進願」書類として大将軍神社の神主である佐藤氏の宅にあったものをコピーしたものである。）

（1）創記：安閑天皇ノ御宇教到四年越国前ヨリ豊後国阿南郷篠原村小倉山上に勧請シタルモノニシテ愛宕権現トモ又大将軍社トモ称し奉ル（豊後国・肥後国誌）明治ノ初年松原神社ト称シ奉ル（神社明細帳）

（2）大友氏ノ崇敬：国守大友氏世々崇敬シ社殿ヲ奉納ス社田ハ現今御供田ト称セラレテ地名トナレリ（年々萬控え帳、其の一）

大友義鎮ハ太刀ヲ奉納ス（寶刀銘）

（3）細川氏ノ崇敬：徳川時代ハ此の地方は肥後細川領トナレリ之ニヨリ肥後国守細川氏世々崇敬ス東山天皇ノ元禄年間ニハ御神具ヲ寄進シ奉リ及び高張提燈二、九曜ノ御紋ヲ附シテ献ゼシメ

ラル九月（年々萬控帳其三、幕張提燈写真）
中御紋天皇ノ御宇寶永七年肥後太守細川越中ノ守縄網大願主トナリ正光寺阿闍梨般若院秀英法印別当トナリ代官谷村兼時監督シテ神殿ヲ改築ス（寛永七年ノ棟札）
孝明天皇ノ御宇安政二年正月肥後太守細川越中ノ守神輿ヲ奉納ス（神輿内壁銘）而シテ世々藩侯ガ御国巡りトテ巡視ノ時ハ必ズ親シク参拝シ毎年旧正月十三日ニハ郡代藩侯ノ名代トシテ随員ヲ従ヘ参拝ス之ニ関スル説話ハ現ニ古老ノ間ニ傳ヘラルル所ナリ（加藤春磨、談話）

（4）社僧の奉仕：本社ハ神職以外ニ古来篠原正光寺ヲ初メ同村清水寺中村計井寺阿鉢村慶林寺鬼崎村ノ定円寺ノ五箇寺供僧トシテ奉仕シ以テ明治維新ニ至ル就中正光寺ハ般若院トモ称シ阿闍梨位又ハ法印ノ僧階ニ進ミ別当トシテ奉仕シ世々ノ棟札ニハ代官庄屋ト共ニ署名セラル（肥後国誌ニ年々萬控蝶棟札一、二、三）

（5）寶物：宝物中特ニ由緒ノ徴證トスベキモノ
・太刀一、大友義鎮の奉納
・古鏡二、室町時代以前ノモノ
・神輿一、肥後太守細川越中守奉納

（6）衆庶ノ崇敬
古来牛馬ノ神トシテ崇敬セラル細川候ガ特ニ崇敬シタルモ藩内牧畜盛大ヲ祈願セシガ為ナリト伝ヘラル崇敬ノ範囲ハ単ニ阿南郷諸村ノミナラズ大分、速見、大野、玖珠、直入、ノ諸郡ヨリ遠ク大分県内外ノ各地ヨリ牛馬守護ノ神トシテ参拝シ数里モシクハ十数里ノ遠キヨリ、牛馬ヲ率イテ参拝スルモノ多ク、此ノ神社ニ限リ特ニ牛馬ヲ鳥居内ニ引キ入レテ社庭ノ草ヲ踏マシムル習トセリタメニ祭典当日ハ神社ノ境内外ハホトンド牛馬市ノ観ヲ呈スルニ至ル。
一般ノ崇敬又厚ク正月十三日ノ大祭ニハ年々数万ノ参拝者アリテ賑ワイイワンカタナク山上山下殆ド人ヲ以テ満タサル大正十二年及ビ十三年度ノ大祭ノ当日ニハ鉄道久大線モ為ニ臨時ノ停車場ヲモウクルニ至リ、大正十三年八月ニハ鉄道次官ヨリ元鬼瀬停留場後ニ簡易駅設置スベキ旨内示アルニ至ルガイシ本社参拝者ノ多キヲ理由ノ一トシタルガ如シ（鬼瀬駅臨時停車場、大正十三年八月十四日鉄道次官ノ書状）
現今恒例ノ社費ヲ分担スル崇敬者ハ三千人ニ超エ年々ノ守リ札（一号ヨリ五号ニ至五種）頒布ハ平均一万一千ニ及ブ（守礼写真）
普通ノ神社ヨリモ一般特殊ノ崇敬ヲ受ケツツアリシコトハ豊後国志豊府近辺神社仏閣由来記、肥後国誌豊後史跡考等ノ何レノ書籍ニモ掲載セラレシニ徴スルモ明ラカナリ、明治三年二月ニハ野津原郷ノ北部惣社トシテ重ンゼラレタル事実（神社明細帳）ニヨリ徴スベキナリ

（7）地方ニオケル本社ノ位置
大分郡ノ西部ハ大分川ノ流域ニシテ自ラヲ一地域トナシ湯平村、西庄内村、挾間村、阿南村、東庄内村、石城川村、由布川村、

谷村ノ九ヶ村ニ分カレ此ノ九カソン中郷社ハ僅カニ谷村ノ白岳社ト庄内村ノ高岡社ノ二社ニアルノミ然ルニ白岳社ハ氏子約六十戸高岡社ハ八十戸を有シ崇敬者ハ一人モナシト聞クニ本社ハ氏子百八十八戸ヲ有シ崇敬者ハ三千ヲ超ヲ見ル他ノ神社ノ内容ヲ云々スルハ誠ニシノビザル所ナレドモコレヲ本社ノスベテノ方面ニ比較スレバ不言不語ノ感ニ堪エザルナリ（大分郡西部神社分布図）

而して雑踏ヲ極ルモノハ八幡村国弊小社柞原八幡宮ノ浜ノ市ヲ除イテハ大分川ノ下流地方賀来村ニ鎮座スル郷社賀来神社ノ賀来ノ市ト大分川上流地方ニ鎮座スル本社即ち保食神社ノ大将軍ノ市トノ二アルノミ就中神社参拝者ノ便ヲ図ルヲ主ナル理由ノ一トシテ臨時駐車場ヲ設ケ次デ常置ノ駐車場ヲ特設シタルガ如キ以テ本社ノ御神徳ト地方ノ崇敬ヲ察セラルナリ（写真保食神社大祭宣伝紙参照）

以下省略

大正十三年九月二十三日

大分郡谷村　氏名

右神社社掌　加藤　廣慶　神社印

内務大臣　若槻礼次郎　殿

【考察】

一、神社の祭神について、

この資料は、大正十三年九月に出された「社格昇進願」である。祭神については、加賀の国からの三社神、即ち、保食神・伊邪那岐神・岩長姫神が祭られてきた。しかし、その他の神々は、篠原の里に来てから後に、祀られるようになったものである。それは主として神社の合併によってである。

この願いには、所在地は、大分郡谷村大字篠原字松原、村社、保食神社　となっている。保食社がこの時の正式神社名であった。ことがわかる。神社名については、何回かの変遷が見られる。

建久元年現在地小倉山（大将軍山）に安置された時は、「大将軍岩屋権現」

明治維新の神仏分離の時、鎮座地名にちなみ「松原社」と改称。

明治十四年九月、篠原村に鎮座する五社の神々と小野村に鎮座する九社の神々を合祀するなどした。

大正十三年十一月郷社に昇格、十二月に旧社名の「大将軍神社」に替える。

（2）の寶物について、大友義鎮奉納の太刀は、二〇一〇年頃、大掃除が行われ神殿の中も全部見たがこれと思われる太刀は存在しなかった。しかし、太刀一本があったが古いものではなかった。神殿の中には、御神体となる石、木造の社殿などがあった。

又、鏡と金色の御弊が収められていた。

古鏡二とあるが、この記録に書いてあるような古鏡と思われるようなものは、存在しなかった。ただ、鏡と称する大きな、鏡があったが古いものかどうかわからない。

神輿が記載されてあり、これは肥後藩から寄贈されたもので貴重なものである。「九曜の紋」が入っており、色も造りも立派で、拝

殿の中の倉庫に棟札とともに納められていた。大切に保存活用されていた。

（三）の項には、神殿改築に当たり、工藤兼時（三助）が監督している。

（六）の「衆庶の崇敬」の事では、多くの人々の厚い信仰が広い地域に広がっていたことを記しているがその通りであったと思われる。鉄道の臨時停車場ができ更に、駅まで出来たのはこの大将軍神社参拝者の便宜を図るためであったというのだから、多くの参拝者が訪れたことがわかる。また、汽車を利用して参拝に訪れた人以外に、徒歩で牛馬をつれて参拝する人も多かった。神社境内にも多くの牛馬が入り込み参拝した。牛馬の鳴き声も賑やかであったそうだ。

当時は、神社の庭や近くの道路に、出店も多く何かと買い物ができる楽しみもあった。神楽も奉納されたので、一層賑やかであった。現在でも地域の人が料理を出したり、甘酒をだすこともある。

毎年一月の大祭には、果樹の苗や花木の苗を売ることもあり、賑わっている。

三、神社の棟札　（大将軍神社）

棟札の一

一七一〇（寶永七）年九月吉祥日の棟札：　干時寶永七寅年

細川越中守綱継公御時代御武運長久

村中助力　庄屋長左衛門

梵字　上棟　奉再建小倉山大将軍神殿一宇御威光増益神徳日新

正光寺現住　阿闍梨般若院秀英

九月吉祥日十方檀家繁栄当初所氏子繁昌如意満足

古国府村　大工　矢野兵三郎鑑事

【説明】棟札一から分かることは、一七一〇（寛永七）年に大将軍神社の神殿が再建されたことを記している。その時、肥後藩の殿様は細川越中守綱継であった。庄屋は、長左衛門で、正光寺には住職が住んでいて、名前は「般若院秀英」と称した。大工は古国府の矢野兵三郎であった。

棟札の二（宝永七年九月十三日ノ棟札）

（表面）

宝永七寅年九月十三日御神殿再建

天長地久四海悉平

大願主肥後大守細川越中守縄網公

当山別当正光寺現住阿闍梨般若院秀英法印代

上棟九州豊後国大分郡阿南庄篠原村小倉山大将軍一宇事

時之大官谷村理右衛門兼輔、当時之庄屋高尾長左衛門

時之大工古国府村矢野兵三郎

御威光増益社頭安全檀越反映五穀豊穣成就衆人快楽牛馬繁昌所

（裏面）

宝永七年庚寅年九月十三日上棟式御祭禮

細川太守様御奉幣御初穂金千疋御神楽料米五俵奉納三日間神楽

芝居有之太守様　御下参之序於正光寺献供之鏡餅頂戴且祝飯饗之

【説明】宝永七年神殿を再建した時、一番主な願主として、「肥後越中守縄網公」となっており、正光寺の住職「般若院秀英法印」の

名前が出ている。文字の中に「五穀豊穣成就衆人快楽牛馬繁昌所」とあり、穀物がよくできること、人々が元気で暮らせること、そして、牛馬が盛んに育つことを願っていることがわかる。他の神社にはこのように牛馬のことをはっきりと掲げているところはない。

何と言っても、肥後の殿様から、金千疋や米五俵が出ていることは、藩から丁重に扱われたことがわかり、神社の格も上がろうというものである。殿から贈り物があったことは喜ばしいことである。また、この時の責任者であろうか、代官は工藤理衛門兼輔となっているが、この人はあの水路開発で有名な工藤三助の父親であろう。

棟札の三（享保五年の棟札）

是時元禄十七年申年為神殿再興従正月十三日同四月二十三日迄一百日の間本尊開帳　賽銭善之網萬人講銀合八百日其上檀中令奉加仕者也宝永寅年年従四月二十三日九月九日迄成就其内閏月有り米銀不足仕逢覆茸十一年間

享保五子年従村中　助力村庄屋長左衛門思立上瓦成就仕者也

大工古国府村専右衛門兵三郎也

【説明】この時は、米銀が不足し、瓦を葺くことがなかなかできなかったようである。

棟札ノ四（享保五年五月棟札）

享保五年庚子年五月ト　般若院秀英代大工古国府村大野専右衛門

梵字　叶御神殿上棟葺替元大五庚申年五月長板大越家龍寶院秀宣代

右同寛延四年辛末年五月長板阿闍梨龍寶院秀宣代

大工　右同人

棟札ノ五（寛政九年十一月二十三日ノ棟札）

（表面）

寛政九年巳年細川越中守御武運長久　村庄屋　甚右ヱ門

梵字　上棟再建小倉山大将軍神殿一宇

古国府村大工　矢野宣右衛門

十二月二十三日　十方檀越繁栄氏子繁昌牛馬息災

（裏面）大工三百五十一工　木挽三百七十九工　上葺き　百工

村の　兵左衛門

彩色百三十三　工　大工二十六工　木挽十二工　寛政十一巳未

五月三日　御領　長野村　井野上喜兵衛

時現住般若院秀仙　施主　都甲玄良遷

【説明】棟札の五の表面の最後の所に、「氏子繁昌牛馬息災」の祈願が書きつけられており、牛馬を大切に願っていることがわかる。この棟札で面白いのは、工事にかかわった職人の職種や人数をはっきり書いているところが興味深い。大工三五〇人、木こり三七九人、上葺き百人、更に彩色百三十三人、大工二十六人、木挽き、十二人等参考になることが多く書かれている。

棟札ノ六（文政五年九月十三日ノ棟札）

（表面）

天下泰平　国土安全　文政五壬午暦
　太守公御武運長久如意祈候
上棟奉再興小倉山御神楽殿一宇　正光寺現住　般若院儀仙
　当村真信氏子中
　御蔵野真信氏子中
風雨　順時　万民興楽九月十三日　庄屋　工藤重蔵秀成
（裏面）
棟梁村ノ佐藤定左衛門　大工仙　人八月二十六日より入込九月八日退散
中村　武七　儀仙病身故本量坊日々見ヶ〆二
阿鉢　金治　勤無悉相勤　屋根九月九日
小倉野　佐藤　治　取付　十一日に葺　村ノ　傳助
田野小野惣右衛門　世話人　藤右エ門
村ノ　茂八　澤右衛門
　御蔵野　虫右衛門
　勇助
　久右エ門
　栄助
　喜兵衛
　善太郎

【考察】この神社の社名の変遷は、一、大将軍神社（一一九〇年）二、宝永元年（一七〇四年）三神を奉安して牛馬の守護神とした。三、明治維新の時に神仏分離をし、鎮座地の名前を取って、松原社とした。四、大正十三年郷社への昇格を期に、旧社名の大将軍神社となる。

【説明】棟札は、「建物の建立や造営・修理のさい、棟木に打ち付けたり、屋根裏に納めたりする木製の札。建築物の造立の由来・修理記録・建築士・大工・建築年月日などが記されており、建築物の史料として重要。」

四、信仰した人々の広がり

（1）鳥居

鳥居銘（一の鳥居）
（向かって右の柱）明治四十一年　阿南村
（向かって左の柱）六月吉日建立　寄進者　日野　弥八

鳥居銘（二の鳥居）
（額）　小倉山
（向かって右の柱）天保十二年辛丑年
（向かって左の柱）正月十三日　建

鳥居銘（三の鳥居）（額）小倉峰

【考察】一の鳥居は明治四十一年に建てられ、柱の右側には、阿南村と記されていることからも、一の鳥居であるから信仰の度合も厚いと考えられ、庄内の人々の信仰が厚かったことがわかる。

【説明】大将軍神社の宝刀：永禄一〇年、一五六七年、次男親家が誕生した時のことで宗麟は三七歳であった。二の鳥居は、残念ながら地震で倒れ新しく改修したので、天保十二年の鳥居はなくなっている。

(2)「玉垣に見る寄付者の広がり」この玉垣は、神殿御廻りに立てられた玉垣

「昭和十二年七月吉日建之」に見える名簿

① 世話人　谷村医　佐藤昇　・谷村助役　吉弘田村　石造物の寄付

発起人　板屋　小野九十九

一、金五拾円　篠原　佐藤但彦　一、金五拾円　小野　目野茂小野　目野サオ

一、〃小ノ　小野近太郎、小野キセ　一、〃　小野　小野鶴喜、小野カズエ

一、〃大分市三ケ田町茶や呉服店幸八郎一、〃　谷村会議員佐藤義隆

一、々　谷村長　佐藤幸恵　一、谷村会議員　谷の曙醸造元馬見塚義人

一、〃総代中村　藤井栄七　中村首藤止次郎　総代　小ノ　大久保貞造

一、〃総代　小ノ二ノ宮新平　一、五拾円　小ノ　波多野真島

一、〃篠原高尾芳雄　〃〃田尻市松一、〃吉松宮喜第一区長佐藤彦安

第二区長　和田鉄四郎　第三区長　目野新

狛犬寄贈者　大分郡賀来中尾　安部菊治　昭和一三年二月吉日　左右とも

牛石造奉納者　昭和十一年十二月吉日　玖珠郡飯田村大字田野字千町無田

酒見ミネ

大分郡西新町　石工　小野千代吉

牛大奉納者　皇紀二千六百年記念　玖珠郡飯田村清水勘次

妻清水ヒサ

玖珠郡野上村　石工　宇佐克己

右黒牛　プラスチック製

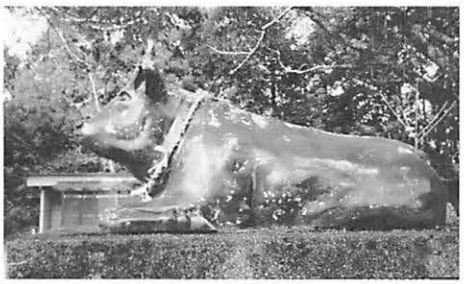
左茶馬　プラスチック製　奉納　世話人　谷村字篠原　高橋勘五郎

奉納　大分郡挾間村大字時松　二宮久　西庄内村

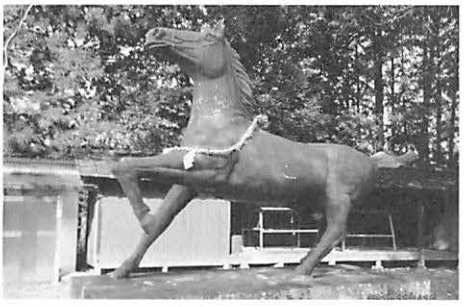
長野　佐藤強

門前の碑　大将軍神社奉納金芳名

一、金　南海部郡明治村　狩生開太郎



奉納者　玖珠郡飯田村　清水勘次
清水ヒサ
玖珠郡野上村　石工　宇佐克己



奉納された馬の像

奉納世話人　谷村字　篠原　高橋勘五郎
大分郡挾間村大字時松　二宮　久
西庄内村　長野　佐藤　強

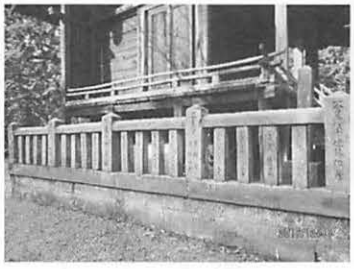
一、金　三拾円　中村祐太郎、上海路　工藤須三
一、金　二拾円　中津市　佐藤實　谷村　佐藤マス　大分市
安達寿亮　阿南村小野猪六　谷村　佐藤見吾
一、金　拾一円　大道、太平寺馬主一同
地区のみ記載すると「湯平、東庄内、稙田村・野津原、由布川、大分市、東庄内、谷、大分市、別府市」
「石城川村、阿南村、西庄内、石城川、速見郡、由布川、速見郡石垣村」
「大野郡今市村、速見郡石垣村、西庄内、熊本県　古閑芳吉」

【寄付者から信仰の広がりを探る】

大将軍神社には、遠くから参拝に来る人が多かったとよく言われた。それを解明するために、玉垣の名前を見た。昭和十二年の神殿の周りの玉垣には、地元の人が多く名を連ねているのは勿論だが、大分市三ケ田町茶や呉服店幸八郎氏の名前が見られる。幸八郎は、呉服店「茶屋」を経営し、当時有名な店であったそうである。また狛犬の寄贈者は、大分市賀来の安部菊治氏であった。玖珠飯田村からは、昭和十一年に石造の牛を千丁無田の「酒見ミネ」氏が寄贈している。同じく玖珠郡飯田村から「大きなプラスチックの牛の像」を寄贈した。

その他、大分市大道町、別府の石垣村、熊本県など今では考えられないような寄贈者の広がりである。参拝するだけでも遠くからでは大変なことであるのに、大正の頃大金を出して寄贈を遠くからすることは、その信仰心の厚さが並々ならぬものと考えられる。

当時、大正の頃は、牛馬が農耕の貴重な力を提供してくれたから、大切にすることは勿論である。農家にとって牛馬は、高価であり大切な働き手であり、農家の財産であった。その牛馬が、病気にでもなれば、農家は困ってしまうのである。そこで無病息災を祈ることは、当然である。


神殿のまわりの玉垣、昭和12年

東の門のところの玉垣

門の横の玉垣

寄進者名簿

寄進者名簿

五、【参拝の思い出】子供のころの参拝の仕方は、向原から歩いて約四㎞行くのが普通だった。大分川に架かる木製の篠原橋を渡って山に登るのが結構きつかった。参拝するときは、普通の大人は鏡餅を二つ持って行って、一つは神様にあげ、神様に上がったものを一つはもらって帰るのが習慣であったらしいが、私は子どもだったので持っていかなかった。山に近づくと多くの知らない人がたくさんいてびっくりした。近づくにつれて神楽の太鼓の音が賑やかで祭りという感じだった。家のものからは、「お前たちはもらい切らんじゃろうが、神様に上がった笹をもらってくるように。」と言われたが、拝殿の近くに行ってみると、裃を着た、地区の役人でごった返していた。神楽殿では神楽が奉納されていた。神楽はどんどん進んで、大声で「俵切り」をする。「つなきりじゃ。」「下がれ、下がれ、子供はもっと下がれ。」というと、白装束を身に着けた中年の男が、鞘のついた刀を持って登場してきた。「今度は真剣じゃ、ひどれ、ひどれ」という。やがて神楽舞は、勢いよく刀を振るようになり、真剣の刀がピカ、ピカ光った。自分もこれは危ないと思って下がった。しかし、刀を振り回すばかりでなかなか綱を斬らない。そうすると、観客や子供はいつ切るかいつ切るかと思って、近づいていく、近づくには訳があった。神楽の武士が「エイ。」と切った時、その綱の切れ端をもらって帰るのが楽しみであったからだ。楽しみというより「綱のわらきれ」を持って帰ると、親や家族に褒められるからだ。何も手に入らなかったら「駄目じゃないか」、はよう行ってトランけんじゃとか言われるのが悔しいので、頑張って取ろうとする。しかし、神楽のおじさんたちは、「あぶねーぞ。」というのでなかなかちかづけない。神楽舞は一層、俵の前をぐるぐる回り刀を振り回しだして、綱を斬りそうになった。太鼓の調子が変わって、神楽舞が俵の正面に来て「エイ」と刀を振り上げて切った。綱きりの時はその下に俵が置いてあり、綱だけを斬って俵を全く切らないのがうまい綱きりだ。この時はうまい綱きりで、綱だけを斬って、俵の藁は全く切れてなかった。そこでみんなは、「うまいぞ。いいぞ」とどっと拍手をした。綱が四方にパッと散って、周りに散らかった。取ろうとすると「あぶねーぞ。」という声が聞こえた。そのうちまた太鼓の調子が変わって、神楽舞は刀を振り回さなくなり、花道を下がっていった。そこへ、どっとみんながかけよってわらを奪い合った。自分もわらを少しでも取ろうとしたが、自分はわらを一つも取りきらなかった。慣れた子は取っていた。羨ましかった。仕方ないと思って、拝殿の前に行くと、クマザサを二本くれた。あまり自慢にもならないと思ったが仕方なしにもらって帰った。家に帰ると家のものに「これが大将軍の笹で。」と言って渡したら、

あまり褒めてくれなくて、「厩(うまや)の柱にくくりつけちょきよ。」と言われた。頑張った割には簡単に言われたのでがっかり。後で考えると、笹なんかあまり効能のあるものではなかったのだと分かった。あの綱の一部でも持って帰れたら褒められたのにと思ったが、残念で仕方がなかった。この藁を持って帰って、馬に食わせると馬は元気になるといわれていたからわらを取りたかったのだ。

その後何十年もたって、挟間町の助役と総務課長が、陣屋の村資料館によってきて「御ひいとしめ縄」を持ってきてくれた。これはすごいとは思ったが、子供のころの藁一本の感激より感激は少なかったのを思い出す。それも、神主が町長だからもらったのだなと思ったから、自分で獲得したのではないなと思ったから、貴重さが落ちたのかもしれない。

このしめ縄と御ひいは、旧式の消防「手押しポンプ」に括りつけて、無事を祈った。

六、伝説

伝説1、「大将軍神社」

宝永六年九月に、肥後の藩主細川越中守綱俊公が江戸へ参勤交代のため、上京しようと家老・重臣を従えて肥後を出発した。阿曽を超えてくる途中、馬は足が悪いらしく元気がなく、なかなか進もうとしないので、大分郡野津原の宿場に宿泊し、家老・家臣を集めて協議したその結果、これは「篠原の大将軍に参拝しなければ府内（大分市）方面に進行すること叶わず。」とのお知らせであると思い、翌朝早くより家老重臣を従え大将軍に参詣し、牛馬の祈祷をし、野津原に立ち帰り、翌朝　馬を引き出してみると馬は元気にピンピン跳ね元気になっており、これなら大丈夫とみて府内に出て、鶴崎へ進み、そこから舟で上京した。一行は三か年の江戸詰めを滞りなく終わり、宝永九年十二月無事肥後に帰り、翌年の旧の正月には、大将軍神社へ家老・重臣を従えてお参りし、十三日より十五日の三日間盛大な祭典をもようし、神輿一台を献納し、金子千疋、米五俵を献納し肥後藩の牛馬祈祷所として制定し、三日間、芝居興行をもようし、氏子には鏡餅及び赤飯をごちそうした。

綱俊公は、肥後に帰った後も、祈祷所として厚く信仰し、毎年お参りしたという。

伝説2、「牛馬の神様　大将軍神社」

篠原の小倉山にある、大将軍神社は、今から約八百年くれえ前、平安時代の終わりのころ、加賀ん国というち、石川県の篠原岳にござった御仏体の三体で、日本でん、指折りの牛馬の守護神仏としち有名な御社じゃった。そん仏様が篠原の山に移っちきたということじゃ。何で挟間町に来たかちゅうとのー、源氏と平家の争いの時、平清盛が、源氏に追われた時んことじゃ、加賀の国篠原岳ん御社に、加藤兵部大夫ちゅう人がおった。兵部太夫は、兵火からのがれるため、御仏体を守っち、安置できるところを求め、日本中をあっちこっち流れ歩いたんじゃ。やがて、寿永四年（一一八五）のこと、やっとんことで、時松ん

「トリスガリ」ちゅう所にたどりついた。加藤氏が初めて時松についた土地の名で、今もこの地名が残っている。「とりすがり」とは、やっとたどり着いて何かにつかまった時の言葉だな。

時松には、加藤氏がやって来た時の地名が、今でも残っちょる。「買い米」、米を買ったところ。米を洗った「洗いの里」、（現在名荒井）とか、姫が綾（あや）を織ちょった音ん聞こえる、綾織谷という名前などがが残っちょる。こんな地名からも、加藤兵部太夫たちがここに暫くいたことが証明されるんじゃ。それからしばらくして、夜中に神のお告げがあって、「南に行け、そこには清潔な山があるから、そこに行って、お宮を造るがいい。といわれたので小倉山に来ることになった。そこは、大変清い所だったので故郷と同じ篠原という名前を付けて住むようになった。

伝説3、「足中石の伝説」

昔々、谷村の百姓の息子　与助は、それはそれは元気のよい若い者じゃった。ある祭りの日に、庄屋の娘を見たときから、こともあろうに庄屋の娘に恋をしてしまった。庄屋の娘が恋しくて恋しくてたまらず過ごしていたがどうしても、庄屋さんにお願いしてみようと思うようになり、思い切っていってみました。

「庄屋さん、どうか庄屋さんの娘さんの桜さんを私の嫁に下さいませんか。」「無礼なことをいうものではない。どうしてお前のような貧乏人に私の大切な娘をやるものか。」

「お願いです、一生懸命働いて、幸せにしますから嫁に下さい。」

「よし、それほど言うなら、お前あの崖に突き出た大石の上で、あし中を一足作りきったら娘を嫁にやってもいいぞ。」と約束しました。

庄屋はあの大石の上には誰も上がったことなどなく、落ちれば死ぬような所だから作れるはずもないと高をくくっていました。与助はわらをもって高い大石の上に上がり必死であし中を作りました。下を見ると目の舞いそうな崖です。与助は必死であし中を作り上げました。庄屋は仕方なく娘を嫁にやりました。与助は一生懸命働いて裕福になり、幸せに暮らしました。

伝説4、「綾織姫の伝説」

大将軍神社を造った、加藤兵部太夫は、今から九〇〇年位前、家族と家来一人を連れて、加賀の国を出ました。綾織姫という美しい娘も一緒でした。源氏と平氏の戦争がはじまったころで、京都から逃れて加賀の国に住んでいましたが、そこも不安になってきましたので、安全で住みやすいところを瀬戸内海を下って探して歩くうちに、豊前の国姫島につきました。そこで、しばらく暮らしていましたがここも、安心できなくなりました。それでさらに探していると別府に着き、別府から山に入り、時松にやってきました。時松は静かでとてもいい所でした。加藤兵部太夫と娘は、ここに落ち着くことにしました。

昔はたくさんの家来と一緒でしたが今は、娘と家来一人と仏三体だけでした。お金も底をついて、住む家もなく、洞穴のようなところに住んでいました。着るものも、食べるものもなく困り果てていました。そこで姫は、「どこぞで何とか糸を都合してきて

おくれ。」と頼みました。爺やはやっとのことで糸を探してきました。姫は、その糸を使って、京都で覚えていた「あや」を織りました。綾というのは、着物の縦糸と横糸を斜めにかけ、模様を織りだす絹織物で美しい着物ができます。姫は毎日毎日こんきよく織って、出来上がると爺やに町に持って行って売ってもらいました。織物は上手にできていたので、高い値段で売れました。それで苦しい生活もだんだん楽になりました。そして一家は谷の篠原に移ることになりました。

今でも時松には、「あや織り谷」「買い米」「洗い」などの地名が残り生活が営まれた場所の名残だといわれています。

伝説5、「田栄(たづくり)神社」と「イボ地蔵」

南大分の深河内地区に大将軍とかかわる「田栄(たづくり)神社」がある。この神社は、元和三年（一六一七）現挟間町篠原にある大将軍神社の分院として建立された。牛馬の神である保食命が祭神である。江戸時代は、「大将軍深河内神社」が社名で近くの農家の人々たちにより盛大なお祭りや牛馬の市が開かれました。この牛馬市の会場は後に賀来の競馬場となったところだそうだ。

「イボ地蔵」の伝説は、竹の上の初瀬井路沿いの所に、古い石で作られた「イボ地蔵」の道標が建っている。疣(いぼ)地蔵は、源為朝が尼が城を築いた時、城の鬼門除けとして祭った仏像が本尊だといわれている。この本尊は地中深く埋められていて、普通には見えないが時々化身の白い蛇が現れるということで、多くの人々がお参りするようになった。本尊の代わりに石の地蔵を祀ったところ、参拝人の疣(いぼ)がころりと落ちたので、疣を落とす御利益があるというので、疣地蔵の名前がついた。

また府内の大給の殿様の馬に疣ができたときこの地蔵にお参りしたところ、馬の足の疣がきれいに落ちたことからお参りが多くなったと言われている。

昭和11年に造られた石像

昭和11年に造られた石像

二の鳥居

東門

七、その他　各地にある大将軍の祠

：古野のお宮にある大将軍神社の祠

：北方の挾間氏の庭の祠に「大将軍像」

：下市のお宮の奥の院に「大将軍像」

：南大分の疣地蔵のもとは、大将軍神社

大将軍神社奥の院にある不動明王

巨大な岩石の上に立つ　不動明王

その他．社名変更願

神社明細帳社名変更願

大分郡谷村大字篠原字松原　旧　郷社　保食神社

新　郷社　大将軍神社

同社は今を去る七百五十余年寿永の頃より大将軍神社として藩並びに一般市民衆の崇敬殊の外厚く押し移り候処、明治初年神仏分離に際し神社名たる保食神社に改称せられたるものなるも世人知る者少なく、社名は本日迄往昔の大将軍神社として呼称せられ居り候に付いては、今回昇格を機会として旧社名にして、最も深き縁由を有する大将軍神社に変更し以て神威の発揚に一層相努め度候条特別の御詮議を以て社名変更の義御許可相成度此の段奉願候也

大正十三年十二月十三日　右神社社掌　加藤　廣慶

氏子総代　佐藤　奉衛

大分県知事　松村義一　殿

神職候補推薦書と傳と添申

大正十二年四月六日　大分郡長　中野　輪　殿

大分県知事　田中　千里　殿

郷内阿南村大字西長宝無格社天満社其の他を企画行の次第に付支障平安へもと認候条御任員御田束度氏名添え申し候也

書記

一、推薦為者学歴及び性行

八等司業品行方正

二、家庭円満及び生活状態

家庭円満　生活上等

三、神社と本人居住地との距離

約一里

四、建武神社之有無　若し有とせばその神社在地

社格、社名　各神社の俸給等

大分郡谷村村社保食社社掌　俸給　九級下俸

同郡賀来村大字賀来郷社　各神社社掌　報酬　四十円

五、兼務を要する理由

他に適任者無きにより兼務を要す

六、候補名たるため卑怯なる運動をなされたる事なきや否や

卑なる運動行い無し

【考察】　社名変更については、明治初年に保食神社に改称したが、一般の人々は、「大将軍神社」と呼ぶ人が多かったので、多くの人々になじみの深い以前の呼び方にするよう今後は、改称する。

大将軍神社と改称。

八、奥の院の不動明王像

（明治五年県の調査）

古義真言宗

京都府管轄山城國宇治郡醍醐

大分県管轄豊後国大分郡篠原村字鶴

本山　永　一　三宝院末　　大楽院

天和二戊壬戌年八月十三日創建開山大阿蘇阿闍梨法印　秀円

前住徳恩長男文久二壬戌八月十五日当県大分郡蛇口村、十輪院にお

いて、以後　同寺に修学　同三癸未年正月十三日住職　元乙丑年五

月より和州吉野山大峯　黒衣錦權大僧都免許　前任法賢　長男

前住法賢　長男

天保十巳亥年二月十五日　於冬寺得度嘉永二巳酉年三月三日住職

文久三癸亥年正月十三日退院

【考察】この大分県「明治五年の調査」についてみると、この寺は本山が京都の三宝院でその末寺となっている。寺の名称は「大楽院」一六一六（天和二）年の開基となっている。この年の八月十三日に、阿闍梨法印秀英によって創建開山された。であるから、一六一二年に「大楽院」は開基されたわけである。それ以後の僧の名前などは現在のところ解明されていない。しかし、明治五年の記録によると、前住徳恩の長男は、一八六二（文久二）年八月十五日庄内の蛇口村の十輪寺において、その寺の修学僧となり、一八六三（元和三）年正月十三日に住職となり、その後、乙丑年五月から和州吉野山大峯黒衣錦地權大僧都免許を得ることになった。

註：①和州は。大和の国。②黄檗宗：篠原の正光寺の奥の院と言われる（不動明王は）庄内町の蛇口から移動されたものであり、そこに「十輪寺」があり、この寺に安置されていた像をはこんだといわれている。この十輪寺は中国から伝わった黄檗（おうばく）宗であった。

「黄檗宗」は、一六五四（承応三）年中国臨済宗の明（みん）僧、隠元、隆琦から始まる。隠元の禅は鎌倉時代の日本臨済宗の祖である日爾（一二〇二～一二八〇）や無学祖元（一二二六～一二八六）等の師でもある無準師範（一一七七～一二四九）臨済禅をあたえるという意味で臨済正宗や臨済宗，黄檗宗を名のっていた。宗風は明治時代の中国禅の特色である天台、浄土等の諸宗を反映したといわゆる混淆禅と言われている。

これは中国一八三九（天保十）巳酉年正月十三日退院とあり江戸時代の終わりごろまでは、住職名が出ている。

この不動明王は、庄内の蛇口の「大楽院」にあった像を運んできて、大将軍の奥の院に安置し、それを奥の院としたものである。明治になって、神仏分離の令が出され、神社とは分離して祭られたと思われる。

しかし、神仏分離令も緩和され、大将軍神社とともにあった正光寺のも移転されたことから、大将軍神社の奥の院としたものである。正光寺は以前小倉山の下の段の「良因寺」などとの並びにあった。現在は竹田市に移転している。正光寺と同じように、大楽院・般若院・東蔵寺・長福寺（現良因寺）などがある。

「神社明細帳」大分県管下豊後国大分郡篠原村字鶴
真言宗醍醐寺派　三宝院末　大楽院

一、本尊　不動明王
一、由緒　不詳
一、堂宇　縦　二間　横　二間
一、境内　百十五坪　民有地　第一種
一、檀徒　無之
一、大分県庁まで四里五町

京都にある三宝院について、「大楽院」三宝院の末寺であることから、江戸時代庄内町の蛇口村からから移転して設置したものであろう。他の年代の神不動明王の独立像としては、大きな像で堂々としている。右手に剣を持ち、左手にけんさくを持っているところは、他の像と変わらないが、髪の組み方や左手の伸ばし方がやや異なっている。目は眼下の挟間の平地をぐっと見下ろしているように見える。このような大きな像をどのような方法で、運んだのだろかと思われる像である。立派な像である。

置かれて台座となってる石は、この地域独特の「すがめ石」と呼ばれている安山岩である。無病息災・病気平癒・除災などの効能が高く此の像単独にお参りする人も多い。

大将軍奥の院の不動明王

調査しての感想

○　千年も続く大将軍神社は、地域住民に支えられて、神社も祭りも長く続いて来たことは、感心するような事柄であり、地域の力が大きいと思う。

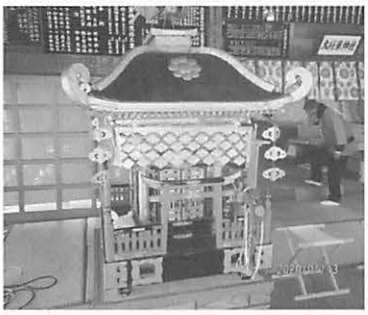
○　この神社は、その歴史が京都から、瀬戸内海、姫島、大分県と広範囲であり、歴史的にも平安時代、鎌倉時代、江戸時代そして現代とそれぞれの時に、栄枯盛衰がありながら継続してきたことは素晴らしいことだと思う。

○　歴史の中で、伝説があったり、熊本藩の信仰があったりするところも、面白く魅力的だと思う。農家が牛馬を使わなくなっても、家畜は大切なものであり、これからも神社を守っていただきたい。

拝殿での神事

大将軍山より高崎山
高長谷山を望む

参拝した子牛



熊本藩からの神輿

第二鳥居

参拝した人々

参拝した子牛

神主に祓いを受ける

神楽を演じる

神楽囃子

祭に集まった出店

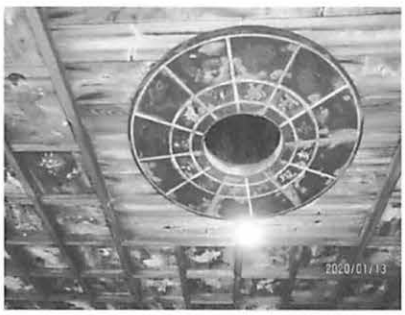
祭りの幕にも九曜紋

熊本藩の殿様から贈られた神輿
神輿の屋根には「九曜紋」が見える

家紋のついた法被を着た氏子

お守りの販売

神輿庫



拝殿の天井絵

祭りののぼり

拝殿の天井絵（馬・鶏など）